

マスミでは毎年年に2回1月と6月に表装材料や和紙、伝統織物の裂地や額、桐箱などの展示即売会を実施しています。近年は書画作品や版画、写真などを掛軸に仕立てたり屏風にしたり額やパネルに自分で仕立てる方が増えています。本職から作家、一般の趣味の方々が気軽に小ロットで購入できるので来場者が年々増えています。展示会のイベントとして毎回表装ワンポイントと裏打ちの講習会を開催し日頃苦労されている方に分かり易い形で表装技術の極意をお伝えしています。今回掛軸制作未経験者の宮崎さんが参加されたので体験記をご紹介させていただきます。

体験記

～掛軸制作未経験者が、

表装ワンポイント講習に参加してみた！～



6月10日(土)マスミ東京本社2階スペースIIで、表装ワンポイント講習が開催された。
今回の講習は、日本の伝統技術の結晶である表装文化の1つ、掛軸た。講師は50年以上、世界中で掛軸制作を教えている宮坂先生である。
はじめに、表装について少し触れておこう。「50年前に日本に伝わった表装文化は、掛軸・巻物・屏風・襖・障子などに始まり、文化財の修復・現代のインテリアまで、古い歴史を持ちながら今なお発展し続けている。多くが掛軸制作の経験者である参加者に、宮坂先生はフレンドリーに話しかける。
「何か困っていることはありませんか？」
実演を交えながら、本に書いていないことも全部教えます。そう言っていると、参加者の瞳は期待にキラリと輝いた。
掛軸制作に必要な道具には、どのようなものがあるのだろうか。紙、糊のり、ハケ、定規(はさみ)……他にも様々だ。道具の知識を多く身につけることは、掛軸制作上達の大切な要素と言えるだろう。
例えば宮坂先生は、市販の定規を削いで、手作りの定規を作るといって「定規って大切です。通常の定規は、厚みがあって、正しく測るのをじゃましてしまうんです」
実際に、手作りの定規と市販の定規とを触り比べ、しげしげと眺めると、頷く参加者が何人もいた。
著者の目からポロリ、ウロコが落ちたのは紙についてだ。
「和紙は何枚にも剥かれる、という人がいますが何枚すくか、で剥かれる枚数は違うんですよ。ちなみに新聞は二回すいているから二枚に分かれる二層紙。だから文字が次のページの紙に滲まないんです。和紙は縮んでしまうので、描かれた作品をのばす・作業が必要ですよ。」のばす・

のに、新聞を使うのを心配する人がいます。
「大丈夫ですか？」新聞の文字が作品に写りませんか？という人がいますが、大丈夫だということが、これでわかるでしょう」
宮坂先生の講習は、冒頭でも触れたように、本に書かれていないようなことが次々と飛び出す。特にそれを感じたのは、裏打ちの実演だ。裏打ちは、掛軸制作の70%とも言われるほど大切な役割を果たす表装の基本だが、宮坂先生の裏打ちは、ほとんどの本には書かれていないやり方だ。
「これがいいとか悪いとかはありません。僕のやり方はこれです」
詳細はぜひ宮坂先生から教わることをオススメしたい。が、少しだけお話しすると、ちょっとした考え方の違いなのだ。「紙にストレスがかからない」宮坂先生のやり方は、その手元をよりしっかりと見ようとイスから立ち上がる人も出るほど、参加者にとって目からウロコ、だったようだ。思わず「ほお〜」と感嘆の声があがるほどに。
今回の講習は、掛軸制作をしている人にはもちろん、制作者でなくても知っていてプラスになることばかりだった。これから、作品を観る時は、作品そのものだけでなく、作品を際立たせる表装にも目を向けたい。表装文化を知ることは、日本のあらゆる伝統技術を学ぶこととほぼイコールだ、と言えるに違いない。
マスミ東京では、定期的にものづくりを学ぶ体験会が開催されている。壁に土佐和紙が貼られた、ほっこりぬくもりのあるスペースで、和の心を感じてみてはいかがだろうか。
(文)宮崎千尋